

仏教通信 「盂 蘭 盆 会」 7 月

「盂蘭盆会」とは、お亡くなりになった祖先に思いをめぐらせ、感謝する日です。私たちのいのちは、父と母の出会いによって誕生します。その父と母にも、それぞれ父（私にとっての祖父[おじいさん]）と母（私にとっての祖母[おばあさん]）がいます。そして、その祖父と祖母にも、それぞれ父（曾祖父[ひいおじいさん]）と母（曾祖母[ひいおばあさん]）がいるというように、「私」のいのちを誕生させるためには、多くのいのちの連なりが必要ということが分かります。そう考えると、祖先のいのちが一人でも欠けてしまうと、「私」が、この世に誕生できなくなってしまうのです。自分のルーツを父と母から数え、10代さかのぼると2,046人、20代さかのぼってみると2,097,150人の祖先が必要となります。人類（猿人アウストラロピテクス）誕生の420万年前から数えると、「私」が誕生するためには、いったい何人の祖先が必要になるのでしょうか？計算すると切りがありません。

私たち、一人一人が、この現代に誕生するまでの間に、天文学的な数の祖先が必要となり、皆さんのいのちは、自分一人だけのものではなく、脈々と続く多くの祖先達の思いや遺伝子の連なりによって成り立っている事が分かります。

さて「盂蘭盆会」とは、インドのサンスクリット語で「ウランバナ」を、漢字に音写したものであり、その意味は「逆さ吊りの苦しみ」というものです。言い伝えによると、お釈迦様の弟子であるモッガラーナ（目連尊者）が、自分の亡くなった母親がどの世界に生まれかわったのかを神通力によって見たところ、自分の母親が餓鬼道の世界でウランバナの苦しみにあっていた事が分かりました。モッガラーナは、どうしたら母親を救えるのかを、お釈迦様に相談したところ、雨季の修行が終わった僧侶たちにお供え物を捧げるように言われました。モッガラーナはブッダの言われた通りに、僧侶たちにお供えをしたところ、母親を餓鬼道から救うことができたと言われています。そのお供え物をした日が、7月15日と伝えられている為、その日に、今は亡き祖先に感謝して、お供え物をする仏教行事として行われるようになりました。日本では、606年（推古14年）の聖徳太子の時代から行われていたと伝えられています。

浄土真宗では、餓鬼道で苦しんでいる亡くなった人や先祖の霊を供養することを目的にするのではなく、亡き祖先をしのび、自分(私)のいのちのルーツについて思いを馳せる日と考えています。

今年の盂蘭盆会は7月14日(金)に行います。

